
ことこと

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとこと

【Zコード】

Z9914R

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

肉じゃがを作ろうと思ったら、じゃがいもがなかつた。

代わりに里芋を作る。

お気に入りの香水はふたが開きっぱなしになっていて、部屋中に香りが漂っている。

同じアパートの、隣の隣の部屋に住む高校生は時々晩ご飯を食べにくる。

そんな日常。

里芋を煮る。

剥いて切つて、塩でぬめりを取つて、一度ほどぬでこぼして。化粧箱の中で香水のふたが少しだけ開いていたらしい。それに気が付かずにして、化粧箱を開くたびにひどく香るようになってしまつた。今朝慌ててふたをきつと閉めたけれど、香りはすぐに消えることもなく、わたしの粗相を責めるように笑つよつこ、狭いアパートの部屋の中でただよつ。

紅いミニボトル。

昔の恋人が好きだつた香り。

もう顔も声も思い出せないのに、香水だけが残つた。

深い水と太陽の匂いがする柑橘類のしづくを混ぜたような香り。あの子が来たら、変な顔をするだろう。

里芋を煮る。

本当はじやがいもが必要だつたのだけど、うつかり切らしていたから代わりの里芋。代わり、なんていつたら里芋が機嫌を損ねるだろうか。だけど玉ねぎとにんじんと糸こんにゃくと、豚肉はあって肉じゃがを作ろうと思っていたのだ。いつも不意に食べたくなる肉じゃが。だけどじやがいもの代わりに里芋。

わたしの住むアパートは一階建てで、ちよつと古くて近くに公園と小学校と保育園がある。隣の隣に住むあの子は高校一年生で、黒ぶちのメガネをかけている。いつも細い目にやるせないような光を宿していて、影がある感じで可愛い。わたしよりずいぶんと背は高いし、もう男として完成にはほほ近い姿かたちなのに、どうしてもわたしには「可愛いあの子」になつてしまつ。

お父さんとふたりで住んでいるといつあの子。

あの子とお父さんは、あんまり仲が良くないらしい。

ゆでこぼした里芋はとりあえずザルに退避していくもれい、糸こ

んにやくの下処理をしてにんじんも玉ねぎも豚肉も切る。包丁はそろそろ研がないとよく切れないので、砥石を買おうか、それともお茶碗の裏で騙し騙しやっていこうか、一度プロの研ぎ師（ちょっと歩いたところにある大きなスーパーの一階に合鍵だの包丁研ぎだの傘直しだのをしてくれる店があるので）、そこまでどうやって包丁を持つて行つていいいのか悩んでしまい（一度も行ったことがない）こに頼んだほうがいいのか。

でも今田も結局お茶碗の裏で氣休めにこすつてみるだけになる。鍋で煮ると焦げ付いたときに洗うのが面倒ので、フライパンで煮物を作る。そういうえば前にあの子が見ていたい、そんなの煮物じゃない、と変な顔をしていた。あの子は眉を寄せて嫌そうな顔をしたり、ちよつと不機嫌な表情のときのほうが男らしい顔になる。その顔が好きだけれど、機嫌はいいほうが嬉しいので、どちらがいいのか時々悩む。

六時に仕事が終わって、六時半に帰宅して。

里芋を煮る間に、キャベツを千切りにしてツナ缶と一緒にマヨネーズで和える。鶏肉を一口大に切つて、中にチーズをはさんで塩コショウをしてお酒を振つておく。焼くのは食べる前に。

洗濯物をたたんだり、炊飯器のスイッチを入れたり、ちょこっと片づけをしたり。八時過ぎて、玄関のチャイムが鳴った。はあい、と発した声が自分で甘かつた。恋、だとかそういうのではなく。

ただ果物の蜜を集めたようなねつとりとした甘や。甘やかしたい可愛いあの子。

「お腹空いてない？」

紺色のブレザーに、緑と茶色の斜めストライプ柄のネクタイ。隣の隣に住む、男の子。

「ご飯たくさん炊いちゃつたから、食べていくといよいよ」

「……なに？」

「うん？」

「飯
飯。」

男の子の言葉。

わたしは「飯なんて言わない、言ひたことがない。だけど意味はちゃんと分かる。」

「肉さと」

「……肉さと？」

「うん。肉じゃが作れりつと思つたらいじやがいもがなくつて。代わりに里芋なの。だから、肉さと」

「……変なの」

「でも味見したら美味しかつたよ、里芋嫌い？」

好きとか嫌いとか考えたことない、と言われて驚く。好きでも嫌いでもない食べ物なんて、わたしの中では存在しない。好きか嫌いか、なのに。食べられるものはみんな好き。口に出来ないものは嫌い。食べられるものの中でもより好きなものは大好きなもの。

「でも、食べられる？」

「食えないものってそんなにないから」

好き嫌いのない人は尊敬の対象。

高校生にビールを出すわけにはいかず、自分ひとりで飲むほどお酒が好きなわけでもないので、ふたりであたたかい麦茶を飲む。ご飯と鶏肉のチーズソテーと、ツナマヨキャベツと、肉里芋。

「あ、お味噌汁作るの忘れた」

「いいよ、別に」

「せっかくもやしのお味噌汁にしようつと思つていたのに」
もやしは足が速いから、使つてしまつたかったのに。

小さなちやぶ台の向かい側にすわつている彼が、あ、と小さな声を上げた。

「なに？」

「食べられないもの、つていうか、嫌いなもの、あつた」「なに、なに？」

「ナスの味噌汁」

色が汚くなるといふとかぐずぐずの食感が苦手、と顔を寄せて言う。わたしの好きな顔だから、ちよつとこしゃしゃしてしまへ。

「なに笑ってるの」

「え、」

「人の食えないもの聞くの、楽しい?」

「ああ、そうでなくて。え、でもこの前ナスの味噌そぼろ炒めは食べてたじゃない」

「ナスは好きなんだよ、ナスの味噌汁だけが嫌いってだけで」長い指が丁寧にお箸を持つて、里芋をつまむ。口に運ぶ。ゆっくりとした沈黙と咀嚼の後で、ふうん美味しいね、と静かに言われる。なんだか照れるほど嬉しい。

「……学校、辞めたい」

「どうして」

「早く働いて、自分で稼いで、親父と別々に暮らしたい」

「お父さんとケンカしたの?」

また、の言葉は飲み込んだ。彼がこつくりと頷く。「家にいたくなかったらここに来ればいいんだから、高校は出て起きなよ」

「なんで?」

「君を好きな子とかが、一緒に卒業できなかつたって悲しむと想つから」

就職のために高校ぐらい出とけ、とかじゃないんだ、と彼が息を吐きながら笑つた。歯並びが綺麗。そう低い声でもないのに落ち着いたトーンで、静かに話す。キスをするときはあのメガネ外すのかしら、とものすごく見当違ひなことを唐突に思つた。

「学校つて楽しいよ、働くのも楽しいけど。だから働く楽しみはお楽しみでもうちょっと取つておいたら?」

「働くの、楽しい?」

「うん。自分の労働がお金になるのってなんか面白いよ。失敗して

どうにか挽回しようとした頭使つたりするのとか。わたし、ただの事務員だけど

「事務員ってどんな失敗するの?」

「計算間違いとか、発注ミスとかかな」

今までわたしがした発注ミスの内容は、そう面白い話でもないだろうに彼は楽しそうに知りたがつて、話してやるといつもより幼い顔でよく笑つた。前言撤回、この子の不機嫌な顔も好きだけど、笑つた顔も好きかもしれない。

特にどうという会話でもないけれど、相手がいるところ飯が進む。ふたりとも三杯ずつ麦茶を飲んで、彼はご飯をおかわりして、里芋をうんとよく食べた。鶏のチーズソテーは少し塩を振りすぎたらしく味が濃かつたけれど、彼は気にならなかつたらしい。

「ところでさ、なんかこの部屋、いつもと違う匂いしない?」

「え? ああ、香水のふたをね、」

開け放しにしてしまつた話をすると、彼は呆れた顔でもつたいないと言つた。

「でもなんか、あんまり塩さんには似合わない感じの匂いだ」
わたしは塩原という苗字で、彼はいつからかわたしを塩さんと呼ぶ。

「そう?」

「香水 자체が似合わない」

「なに、失礼な。大人じゃないってこと?」

「ご飯の匂いが似合うよ。ご飯作つてる匂い」

「大人の女じやなくて、おばちゃんみたいてこと?」

そうじやなくて、と焦つたような彼が可愛い。意地悪をした気分になつたので、満足した。別にいいけど、と言つてあげる。

「明日も来る?」

「飯だけ食ひにきて悪いみたい

「悪くないよ、ひとりで食べても美味しいし」

彼は静かに笑つて、肯定も否定もしなかつた。元々毎日来るわけ

でもないし、次の約束をするわけじゃない。ふらりと続けて来る日もあれば、一週間くらいまつたく来ない時だつてある。

同じアパートに住んでいるのに気配すら感じないときもあれば、姿は見えないのできっと今日は会えると変な確信があるときもある。

「……塩さんは香水とかよくつけれる？」

「そんなにつけないよ、友達の結婚式とか、合コンとか、デートとかにしか」

「……デート、とか、すんの？」

するよ、と言つたらこの子はどんな顔をするだらう。単純な興味から言つてみたい気はしたけど、相手もないのにデートする、なんてなんだか嘘をついているようでもあるので、少し考え込む。

この子はわたしが好きなんだろうか。
わたしはこの子が好きなんだろうか。

世の中は白と黒ではつきりさせないといけないのだらうか。

灰色のまま、居心地がいよいよ悪いような、お互いを意識したようなしてないような、そんなままでいたいと思つるのは間違つているのかいないのか。

分からないけど。

「デートしてる暇があつたら、今はなんかことこと煮てる方が樂しいかも」

「ことこと？」

「うん。ことこと、つて煮るのこくりくべぴたりな擬音だよね、わたし、ことこと煮るって言葉好む」

「ことこと？」

「やう。今度お豆とか煮ようかな、好き？」

「ことこと？」

「なに、壊れたみたいにことことことばつかり」

唇が自然に持ち上がりつて、微笑がこぼれる。ショッパンの豆は好きだけど、甘い豆はおかずにならないから、と言われた。おかずにならないから嫌い、だろうか、おかずにならないから好きでも嫌いで

もないけど食べる、だろうか。

言葉が通じる犬とか猫といふ気分。

「塩さんは好きなの？」

「つむのお母さんが豆煮の好きだったから、家にいたときは食べる専門だつたけどね。今は自分で煮ないと食べられないし」

「売ってるじやん」

「売つてるのは甘すぎるんだもん、もつとせりつとした甘さのが好きなのよ」

さらつとした甘さつてよく分からない、と言つので、食べてみれば分かるのよ、と答える。だから今度煮とこしてあげるね、と付け足す。

「金時にしようかな、花豆がいいかな、白いんげんにしようかな」

「豆の種類？」

そう。

母親が煮るのは金時と花豆が多かつた。

薄ピンクと茶色を混ぜたような可愛い色の金時と、黒の濃い紫色の大きな花豆。思つたらすぐに食べたくなつて、スーパーに豆を買ひに行きたくなる。一晩たつぶりの水に漬けて、乾燥した豆がふつくらと戻るのを見るのは楽しい。

「なに考えてるの？」

「え？」

「楽しそうな顔してる」

「わたし？ 楽しそうな顔してた？」

「してた」

「じゃあ楽しいんだよ」

「なんだよそれ、他人事みたいに」

麦茶もう一杯ずつ飲んで、彼はそれじやそろそろと帰る。

隣の隣の部屋に。間取りはきっと同じだけど、中はこじとまつたく違うだろう。わたしは彼の部屋を覗いたことがない。だけど不公平な感じはしない。

「塩ちゃんがなんかことじと煮てると、」

うん。

玄関まで見送る。

彼の足はわたしの足よりはるかに大きいらしく、並んだ靴が笑つてしまひほどのサイズ違つた。

「煮てると？」

「なんとなく誘われてくるから、また何か煮てて」「わたし、おばさん通り越しておばあちゃんみたいね」
があちやんつてそういうえばなんか煮てるイメージだ、と彼はわたしの言葉を否定せず、遠くを見るような顔をした。

「こと」と煮る。

きつと、わたしと彼の関係も、美味しくなるのか煮崩れるのか、焦げてしまつのかふつくりするのかは分からなければ、時間をかけてことこと煮るのだ。

じゃ、また。

うん、また。

明確な約束はないけれど、また、は未来の言葉。

未来の君に、また会う言葉。

お父さんとケンカしないでね、の言葉は飲み込んで手を振る。彼は振り返したりしないけど、小さく頭を下げる。ドアが閉まる。とりあえず明日の会社帰りに豆を買わないと。

明日の予定ができる、わたしはそれをやかな未来の予定を手に入れ

る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914r/>

ことこと

2011年3月28日11時10分発行